

平成26年度 八戸学院短期大学の地域貢献

Hachinohe Gakuin Junior College's contributions to local communities in 2016

外 崎 充 子

1 地域貢献活動の計画と報告

平成26年5月の教授会で、学長は教員全員に「地域貢献活動計画表」の提出を求めた。要請の意図は「本学は地域密着性を強みとして多くの貢献活動をしているがその実態が掌握されていない。客観的な資料を得て教育の

効果を実効あるものにしたい」というものであった。

6月に出された計画書の件数は下表のとおりである。重複件数を整理すると98件の計画が提出された。

学 科	幼児保育	ライフデザイン	看護	計
計画件数 (延数)	47	25	75	144
計画件数 (実質)	43	20	35	98

報告書は教員1人につき1件とし (全体で 39件)、所定の様式で報告書に掲載した。

学 科	幼児保育	ライフデザイン	看護	計
報告件数 (一人1件)	15	8	16	39

2 活動件数の分類

件数の分類は平成26年度「八戸市勢要覧」第5次八戸市総合計画後期推進計画・戦略プロジェクトの四つの柱による分類を引用させていただいた(同要覧p.43~47)。分類の内容は次のようなものである。

A 地域活力の創出

企業誘致の推進、地元中小企業の体質強化をはじめ、地域資源を生かした農水産業の振興や観光資源、また産業経営基盤の八戸港の活用と地場産品の販路拡大、さらには産学官民連携による企業支援など、市民生活の充実

を図る。

B まちの魅力創造

個性あるまちづくりを展開する。

C 地域の安心確立

「子育て支援及び教育環境の充実」「健康づくりの推進と暮らしの相談体制の充実」など市民が安心して暮らすことができるしくみづくりを進める。

D 自治力の向上

市民満足度の高い行政サービスの提供を図る。

3 学科ごとの分類

上記の分類に従って各学科の件数の内容を整理すると次のような数値になる。

	幼保	ライフ	看護	計
A 地域活力の創出	7	3	2	12
B まちの魅力創造	17	10	1	28
C 地域の安心確立	18	7	32	57
D 自治力の向上	1			1
計	43	20	35	98

この表の数値から本学の地域貢献は「B まちの魅力創造」と「C 地域の安心確立」の活動が多いことがわかる。幼児保育学科はBとCが多く、ライフデザイン学科はBが多い。看護学科はCが多く、全体ではCの合計が過半数を占めている。すなわち、本学の活動は「個性あるまちづくり」の展開と「子育て支援及び教育環境の充実」「健康づくりの

推進と暮らしの相談体制の充実」など市民が安心して暮らすことができるしくみづくりの活動を行っているという結果である。

この結果は、本学の学科の特性から見て、当然の傾向であり、自然に導き出されてきた結果であるといえよう。これは本学の実態の傾向を示し、かつ、今後の活動の方向性も示唆しているものといえる。

4 本学の教育方針と地域貢献活動

次に本学が掲げている「建学の精神」から「重点目標」までの方針との関連はどのようなになっているのか、それぞれの文言を掲げて検証してみる。

建学の精神	神を敬し、人を愛する
教育理念	～地方の時代の到来にこたえ、 <u>地方文化や地域経済に密着した教育</u> をすることを理念とする
学習成果	建学の精神を理解し、専門的分野において身に付けた専門性と人間性をもって <u>地域に貢献</u> できる人材に到達すること
重点目標	地域貢献の推進～ <u>地域貢献の実践</u> を通して学生の自主性と本学の独自性を涵養する（平成 25 年度より継続）

各学科の教育目的と学習成果

学 科	学科の教育目的（抄出）	学科の学習成果（抄出）
幼保	<u>保育の社会的発展に貢献</u> する人材を育成する	子どもを受容し共感する感性をもち、子どもの権利を尊重しながら、 <u>地域や保護者と連携</u> することができる
ライフ	<u>社会に貢献</u> する行動力とバランスある思考力を有する人材を育成する	将来に対する明確なビジョンをもち、 <u>社会に貢献</u> できる行動力と論理的に問題解決ができる思考の能力を有する
看護	<u>地域の保健医療活動、健康増進</u> に貢献できる人材を育成する	看護学の各分野における専門性を有し、 <u>現代社会が求める健康ニーズ</u> に対応することができる。

地域貢献活動を上記の本学の教育方針に照らし合わせてみると、まさに本学の方針に適合した活動であることがわかる。本活動は貢

献活動を通して教育目的の達成を図り、専門的・汎用的学習成果の獲得に努めていることの証左となっている。

5 地域貢献活動の成果 ～報告書の記述から～

報告書にはこの活動を通して学生が理論と実践の融合を図り、人間的にも成長した様子が書かれている。

幼児保育学科

◇ 会場の子ども達^①が自然に声を合わせ、笑い声が湧き上がる大きな反応があった。

～読み聞かせ A ゼミ

◇ ダンスの楽しさを伝えるボランティアに自主的に取り組んだ。

～ダンスサークル

◇ 園長各位が現在の学生がおかれている就職環境を理解し、自園の雇用に関して資

料が参考になった。

～保育者養成懇談会

- ◇ 造形制作の機会を設けることで造形芸術が創造性のある生活を営み、人生を豊かにするものとして大切なものであるということを伝えることができた。

～美術科

- ◇ 参加者の運動習慣の定着および精神的健康の向上という点で本学の教室が寄与した。

～シニア運動教室

- ◇ 積極性が育ち、大勢の人の前に出て物怖じせず振る舞えるようになった。

～読み聞かせBゼミ

ライフデザイン学科

- ◇ 番組のリスナーから手紙をいただき、15年続いている番組に新風を吹き込んだ。

～ライフデザイン学科有志

- ◇ あと一作満足できる作品ができれば第三版を出版したい。

～教員詩の創作

- ◇ イベントが成功裏に終了し、学生は達成感と充実感を味わった。

～ジャズボランティア

- ◇ 食事バランスチェック表の記入結果から食生活について変化が見えてくると推察される。

～食事栄養指導

- ◇ 子どもやその親に親しむようになり、絵本もうまく読み聞かせられるようになった。

た。

～読み聞かせ「青い鳥」

- ◇ 農家での作業や会話により積極的な資源発掘調査への姿がみられた。

～観光資源掘り起こしワークショップ

看護学科

- ◇ 「子どもの頃の体験と青年期の健康や生活の質との関係」について研究結果を第34回日本看護学学会および2015 AAAS Annual Meetingにおいて発表した。

～看護科教員

- ◇ 認知症の特徴が理解された。

～看護学科教員学生

- ◇ 「子どもの体験活動の実態に関する調査」の実証研究 その結果を学会で発表し、検討のための情報を得た。

～看護学科教員学生

- ◇ がん患者のタオル帽子作成 今年度八戸市民病院に100枚 八戸赤十字病院に100枚寄贈した。

～学生によるボランティア活動支援

- ◇ タッチケア 生後直後からのふれあいを積み重ね母親と児の絆が生まれ愛情形成を促す。

～看護科教員

- ◇ 八戸地域の看護職を中心としたボランティア活動 訪れた住民の健康上の問題について解決の支援を行った。

～看護科教員

6 主な地域貢献活動例 ～「地域貢献活動報告書」から～

(1) 全学単位の活動

八戸市七夕祭り 八戸小唄流し踊り

- | | |
|--|--|
| <p>① 活動の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 本学1年生、教職員等総勢約 230 名参加の「八戸小唄流し踊り」は街の賑わい・活性化に貢献している。 ・ 八戸市の恒例祭事への本学参加は 8 年目になり、踊りも運営もほぼ安定・定着してきた。 ・ 学生、教職員、後援会との交流・親睦にも大きな成果が見られる。 ・ 学生が踊る楽しさに気づき、踊りを体得することは地域の文化・郷土芸能の伝承に繋がる。 | <p>② 成功のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 担当者の計画と配慮 ・ 年度初めの宿泊研修での練習 ・ 学科ごとの係り教員配置 ・ 主催者の東奥日報が行う各団体の打合せに出席 ・ 花柳流泉先生の指導 ・ 体育の授業の一部提供 ・ 後援会の方々の支援 ・ 反省会（納涼会）の実施 <p>③ 今後の課題</p> <p>本学の恒例行事として今後も継続して取り組んでいくこと。</p> |
|--|--|

(2) 学科単位の活動

幼児保育学科 八戸市子どもフェスタ オペレッタ発表

- | | |
|---|--|
| <p>① 活動の成果</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児保育学科 2 年生全員が表現Ⅱの授業の集大成として 2 月に八戸市の公会堂でオペレッタを上演している。 ・ 「八戸市子どもフェスタ」の一環として休日に上演し、市内の子ども達、保護者の方々本学卒業生等に親しまれ、毎年好評を博している。 ・ 総合芸術に近づくために踊り・歌・ダンスの練習をし、大道具・小道具、背景、衣装等に工夫こらし、年々質が向上している。 <p>② 成功のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽、美術、体育の 3 学科の教員が一体 | <p>となった指導体制</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「共同制作から学ぶ 5 つの目標」の設定と周知 ・ 学生たちの創作練習上の葛藤、コミュニケーションの経験 ・ 2 日間のリハーサル ・ 学生の創造性・協調性・感性が躍動感のある表現を創出した。 <p>③ 今後の課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 発声の訓練が必要である。 ・ 手作り衣装の布の扱い方に注意が必要である。 |
|---|--|

ライフデザイン学科	種差海岸でボランティアリーダー
-----------	-----------------

① 活動の成果

- ・ 種差海岸が三陸復興国立公園に編入し、インフォメーションセンターが新設されたことを受けて、本学科が地域の魅力を発掘・発信し、地域の活性化に貢献している。
- ・ ゼミナールごとにテーマに沿って取材して壁新聞を作成し、種差の魅力をアピールした。
- ・ 1年生全員が活動を新聞記事にまとめ「生涯学習論」で発表した。
- ・ 壁新聞はインフォメーションセンター内に展示して多くの観光客や地域の方々から好評を得た。
- ・ 学生が卒業後もボランティア活動に参加して地域に貢献したいという感想を述べ

ている。

② 成功のポイント

- ・ ボランティアリーダー担当教員による事前の準備と綿密な計画の立案、遂行
- ・ 種差インフォメーションスタッフから種差海岸の歴史・植生・地学・文学の説明を受け、スタッフとともに海岸・芝生・松林を探訪した。
- ・ 学生の学習意欲と積極性
- ・ 学科全教員の協力と連携

③ 今後の課題

- ・ 活動のテーマに関わる事柄を事前に時間をかけて学習することで大きな成果が得られる。
- ・ 地域の魅力を今後も多くの人に伝えていく。

看護学科	八戸市環境・健康フェスタ 2014	健康まつり & 環境展
------	-------------------	-------------

① 活動の成果

- ・ 市民の健康状況や生活活動状況を身体面、運動面、栄養面、心理面から把握するため、各種アンケートの他、握力測定・身長測定・体組成計測定・骨密度測定・貧血検査・血圧測定などを行った。
- ・ 測定結果を一人一人に説明し生活指導を行うことで、市民の方々に健康について再認識してもらうことができた。
- ・ 八戸学院短期大学のコーナーには、251人の来訪者があり、昨年度に引き続いて来場する方が多数おり、学生にとって市民の方々と交流する貴重な体験であった。
- ・ 学生にとっては既習学習を復習し応用

し、実践に活かす学びの機会となった。

② 成功のポイント

- ・ 参加募集するにあたり、地域貢献に繋がるボランティア活動の意義について説明し、動機付けを図った。
- ・ 担当する部署の事前のオリエンテーションを充実させ、また、担当部署をローテーションさせることで経験内容を多くし、学びの機会を増やした。
- ・ 教員が各部署のサポートに入ることで、学生は安心してのびのびと実践することができた。

③ 今後の課題

- ・ 来場者が多く、長時間にわたる待ち時間や場所およびその誘導などを検討する必

要がある。

活動に力を入れる。

- ・ より多くの学生が参加できるよう、募集

(3) 地域貢献活動賞受賞事例

八戸せんべい汁研究所学生サポート

① 活動の成果

- ・ 八戸せんべい汁研究所は 11 年前発足。八戸市は B-1 グランプリ発祥の地。本学の教員が地域の若者に町おこしを経験して継承してもらいたいという願いから、6 年前にライフデザイン学科の学生を募集したのが始まりである。
- ・ 八戸せんべい汁研究所サポーターとして学生が自ら考え、行動し、スタッフのみならず来場者の方々とも積極的な交流ができた。
- ・ 研究所のスタッフにも 1 年の時とは別人のようになり見違えたとの評価を得た。
- ・ 学生が地域をよく知り、社会人との交流を深め、マナーを学び、コミュニケーション能力を高めた。

② 成功のポイント

- ・ 研究所のスタッフが「明るく、元気に、楽しく」行動している。
- ・ その輪の中に入り、いつの間にか引っ込み思案が消え、若者らしさを発揮した。
- ・ 学生は各地で行われるイベントに参加することにより全国大会でも自ら行動することができ、貢献している実感を得ることができた。

③ 今後の課題

- ・ 卒業してからもせんべい汁研究所サポーターとして参加して欲しいが、仕事の都合などで参加者が増えていないのが現状である。

④ 受賞理由（審査は学科長会議で実施）

- ・ 担当教員（馬場祥次准教授）は八戸せんべい汁研究所学生スタッフの顧問として学生を指導、引率して 6 年前から地域貢献に携わってきた。学生たちは裏方として地域や全国のイベントに参加し、多くのことを学び、成長し、社会へ巣立った。社会人になった今も活動している者もいる。
- ・ 八戸せんべい汁研究所は平成 24 年、B-1 グランプリ全国 1 となり、一躍全国から脚光を浴びる団体となった。地域おこしの先駆けとして八戸市に 563 億円とも言われる大きな経済効果をもたらした。
- ・ このような成果の一原動力として本学ライフデザイン学科の学生（総勢 50 名）の活動は評価に値するものである。
- ・ 6 年間に亘る息の長い活動を継続し、学生の社会力を育て、大きな地域貢献を果たした担当教員の功績は甚だ大きいものがある。

7 本活動の意義

(1) 貢献活動の掌握

平成26年度の本学の地域貢献活動は本まとめによって全体を掌握し、その傾向を把握することができた。すなわち「地域の安心確立」と「まちの魅力創造」への協働と貢献である。

学生にとっては自主性と自立性の発揮、教員にとっては教育的意義の理解、本学にとっては学習成果の検証、地域に対しては「地域の安心確立」と「まちの魅力創造」への貢献、とそれぞれに大きな意義があった。今後とも学科の特性を生かし、この2方面に力を傾注していきたい。

(2) 今後の方向性

平成26年度の地域貢献活動は教員の計画書提出から始まってPDCAサイクルで進行し、報告書で年度の終結を迎えた。しかし、活動は継続して行われ、実績が年を追って蓄積されていくことになる。活動の成果には時間的経過も必要であるので、次回は3年後に計画書と報告書の提出を求め再度実績を検証していくこととする。

なお、本学では地域人の招聘も推進しており、授業での講師招聘も実施している。今後は「地域学」の導入も視野に入れて双方の交流を深めていきたいと考えている。

8 課題と展望

本学は地域連携研究センターと連携をとり、大学と一体となって新郷村、八戸市南郷区、階上町、五戸町と地域協定を締結して、官、民と連携した活動にも力を注いでいる。学生の行事参加をはじめ、教員も研究活動、地区の委員会委員、研修会や講習会の講師など、自発的に、また要請に応じて活動をしている。概して地域や行政との協働事業や補助活動は円滑に進められており、実績も周知されつつあるといえる。しかし、発信や提案などの地域の牽引的な関わりにまで至っていないとい

うのが実情である。学生・教員ともに参画の意欲は充分あるので時間や日程を工面してより積極的な活動を展開させていきたい。

短期大学にとって種々厳しい現状ではあるが、この度の「計画書・報告書・まとめ」により、貢献の分野がはっきりし、本学の方向性も明らかになってきた。「教育・研究・地域貢献」という大学教員の枠組みを踏まえて、さらに地域での教育の効果を実効あるものにしていきたい。